京の歳月

壽岳　章子

壽岳　章子 / じゅがく・あきこ
大正13（1924）年京都生まれ。昭和21（1946）年、東北帝国大学法文学部卒業。専攻は国語学。昭和62年、36年間教鞭をとった京都府立大学を停年で退官。専門は、中世日本語語彙と言語生活史。女性史にも関心が深い。『レトリック』（共文社）、『日本語の裏方』（懇談社）、『日本語と女』（岩波書店）、『京に暮らすよろこび』『京都 町なかの暮らし』（草思社）など著書多数。

壽岳　章子

本誌1997年7月号の巻頭インタビューにご登場いただいたアレックス・カー氏は、その著書『美しき日本の残像』の中で、「残念ながら京都という町は“病気”です。京都の伝統芸術・文化の中枢を訪れると、そこで見られるのは大理石のロビーにシャンデリア、ぴかぴかのインテリアです」と書いている。京都の町こわしが急速に進み、「もう京都に美しさは残っていない、京都の美しさはもう日本人の心の中にあるだけになってしまったのではないか」とも言う。今回は、親子二代＊古きよき京都の町とともに生きてこられた壽岳章子さんに、京都の魅力、京都への思いなどを語っていただいた。

＊　＊　＊

来日中のシラク大統領が、セーヌ川にかかるPont des Arts（ポン デザール）（芸術橋）を模した橋を鴨川にかける提案をしたのは1996年11月だった。1998年の「日本におけるフランス年」と京都-パリの姉妹都市盟約40周年を記念したこの提案は、市によっていったん受け入れられたが、その後、景観論争、市民の反対運動などに発展して市政のあり方自体が問われることになった。議会で予算を議決した後に計画を撤回するのは異例のこと。京都市では88年3月に廃止された古都税以来のことだ。

――これが芸術橋を巡っての事の顛末ですが、渦中で体験されていかがでしたか。

「あれは市民総ぐるみという感じでしたね。反対運動のクライマックスは、忘れもしない1998年5月30日。集会をやるといったら、河原に後から後から人が集まってきた。組合を通すなどいわゆる組織動員をやらなかったのに、ひとりでに集まってきました。私がその大会の音頭取りをやりまして、京都人のパワーを実感できておもしろかったですよ」

こうして、同年8月、「市民理解のない着工は多大なマイナスを及ぼす」として市によるこの計画は白紙撤回された。

――新しい京都駅は日本全国で最も大きな駅ビルをもっているそうですね。

「今京都には人をドキッとさせるようなものがたくさんありますが、京都駅はその最たるもの。ホームに行くためにはちょいと入るけれども、絶対上にあがらないんですよ。ホテルもできたでしょ。そこでよく会合があるんですが、私絶対行かないの。高いビルを建てるなー、と演説したことがあるので、今も足を一歩も踏み入れない。だんだん世間が狭くなるの。たいへんよ、操をたてて生きるのは（笑）」

――京都の人たちは皆、壽岳さんのようには考えないのですか。

「京都には市民運動の団体が100以上あります。私は町並みを守る会というのもやっていますが、結局、それを上回る無関心が大勢いるということですね。意外と平気な人が多い。だから革新が選挙で負ける。政治の話はあまりしたくないけれど、京都は20年ほど前に革新が負け出してからダメになりましたね。町の変わり方が激しくなりました。京都では、文化的なことも含め、革新が保守なんですよ」

――無関心の理由は何なのでしょう。

「あまりにも京都というところに慣れすぎてしまったんじゃないですかね。のんびりしているというか、平安時代からの歴史において大して変わらなかったのだから、自分が何かしなくても、何も壊れたりしないと思っている。どんなにたいへんなことになるかわかっていない。ヨーロッパは陸続きなのでいつ国境を越えて攻めてくるかわからないけれど、日本はそれがなかったから、長い間なんとなくやってきているでしょう。

私はもちろん平和主義者ですから、戦争がなくなったことは本当にうれしく思いますよ。けれどもその平和の中で、美しいものを育てるとか、ちゃんとした伝統を育んでいくとかいう積極的な働きかけがなければいけないと思います。怠け者的な平和思想が流行っているのではないかしら。環境保護などにしても、例えば森林破壊を防ぐためには、本当に辛抱して森を残していくという強い決意が必要ですしね」

――「わび」「さび」「風流」など、日本人がかつてもっていた文化に通じる心が失われてしまったようですね。文化を大切にする余裕がなくなっているように見えます。文化とは、その国に住んでいる人の生き様そのものとも言えるでしょう。文化に対する日本人の無関心、無神経が、陰湿ないじめ、援助交際などを生み出す遠因にもなっているのではないでしょうか。

「確かに精神性の喪失を感じますね。日本人は、仏様にしても神様にしても、すべて何とかのためとか、どうしてほしいとか、利得のために拝む。本当の意味での宗教的な豊かさというものがなく、交通事故に遭いませんように、試験に受かりますように、自分自身のため、自分の家のため。これでは、文化を大切にする心もなくなってしまいますよね。

日本人というのは、なんというか、おっちょこちょいのところがあるでしょ。日本を舟にたとえれば、こっち行って騒いで、あっち行って騒いで、舟がいつも傾いている。落ち着いたところがないのね。一時的な流行というものにとびついて大騒ぎをする。どんどん変わっていくものに対応するのは楽しいし、いいことでもあるんだけれど、“ばっかり文化”でしょ、日本人は。もともとそういうところがあって、戦前までではそれが抑えられていたけれど、戦後一気にバーッと出てきたんじゃないですか。なんか子供っぽくて、うーんと腕組みをして物事を見守るような精神に欠けるような気がしますね」

――戦後急激にアメリカの資本主義が入ってきて、日本人はいつのまにか、利益第一、儲かればいいという国民になってしまったのかもしれませんね。

「京都の繁華街、河原町通りのようなあんなむちゃくちゃな所はないと思うのね。赤、白、黄、もう見てられないような無様な通りになっています。日本人の、儲かれば何をしてもいいという利益第一主義で、そこにお店を出せば儲かる、他のことはどうでもいい、それで京都の町並みもずいぶん破壊されたと思います。西陣方面の小さなお店、工房なども駐車場やワンルームマンションになってしまう。

パリみたいにしたらいいと思うんですけどね。古い町並みはキチッと守って、そればかりではだめなので、高いビルはちょっと離れたところに地域を定めて集める。京都の南の方に空き地があるのでそこを利用するなどしてね」

――ヨーロッパの街は、国と国民がいっしょに古い町並みを保とうと努力していますね。それがまた国民の誇りともなっています。フランスでは、歴史的記念物には相続税がかからないそうです。持ち主はそれらを維持していくだけでかなりの費用を負担しているからです。

「税金には本当に困っています。京都には特に重要文化財でなくてもいい建物がいっぱいあるのに、相続税をなんとかしないとみんな細切れになってしまう。それでお金儲けをするわけでもないのだから、そのままにしておいてくれればいいと思うんですが。京都は本当にがんばらないと、京都的なものがバラバラになってたいへんなことになりますよ」

―― これからの京都は？

「町は変わっても、人はなかなか変わらないものです。これまで何も変わらないものと思って悠長に構えていた京都人も、危機感をもって積極的な平和主義者になってほしいですね。古きよき京都を知っている人たちの中に望みの綱があると思っています。

京都だけがもっている産業が今でもずいぶんあります。織物にしても、塗り物、陶器にしても、日本文化の粋を集めたようなものがたくさんあります。これらの人の心に滲み入るようなもので、京都は京都であり続けたいですね。小さな 筒とか机などのミニチュアを全部実物と同じように作っている職人さんがいましてね。かわいらしい下駄箱や針箱などもあって、引き出しには全部引き手もついているんです。何の役にも立たないんだけど、ちっちゃく作ってるの。そういう物を作っている限り、戦争もなし。

文化を大事にする心はそういった目に見えないところで育まれるんだと思います。後継者不足が叫ばれるようになって久しいですが、この不景気ですからね。若者が戻ってきている所もありますね」

―― 久しぶりに京都へ行ってみようと思い立った人に、何かアドバイスはありますか。

「名所などはどうぞご勝手に見てください。例えば清水寺などはやっぱりいつ行ってもすばらしい所ですよ。けれども、例えば中京（なかぎょう）あたりのいろいろな通りを歩いて、そこらへんのご飯を食べて、昔の面影が残る問屋なんかでお店の人と話をして、四条通りに出る。そういう京都はまだ生き生きしてます。京都は縦横に深みのある大きな町で、そこに住む人たちの暮らしを支える多くのいい通りがあります。京都の人たちはちょっと警戒心が強いところがあるけれど、本当はいい人なのよ。安心してお話しください。

もう大正時代くらいからのめっぽう古い家が貸家になっていることが多くて、それらはとても安く借りられます。事情の許す方は、しばらく京都で暮らしてみてはどうです。確かに町の破壊は深刻に進行しつつあります。でも京都には、それに立ち向かう十分な歴史の重みがあると思いますね。歩けば必ず何かの発見がある、底力のある町なんです」

＊父上は英文学者壽岳文章氏、母上の静子さんも『朝』『歳月を美しく』などの著書をもつ文筆家。

表紙の写真

ロバート・バイヤース作品

Tree Stump, Tokeland, Washington, 1987

「樹」は生命の象徴として、よくモチーフに取り上げられます。幹は天へ、根は地へと、天と地を結ぶ架け橋のように、どっしりとした存在です。この作品では「樹」は抽象的に捉えられており、フォルムは光によって変幻自在に様をなし、樹皮や木肌は綿密に描写されています。これも写真ならではの表現と言えます。

写真展のご案内

© Chris Steele-Perkins / Magunum Photos
" Walking in Nomansland " Boys in the Rain, Lesotho, South Africa, 1981

P.G.I.（虎ノ門）

7月13日（火）―30日（金）
David Perry “ HOT-ROD ”
デビット・ペリー 作品展「ホット・ロッド」

8月3日（火）―9月10日（金）
Chris Steele-Perkins “ Walking in Nomansland ”
クリス・スティール・パーキンス 作品展
＊8月16日（月）～20日（金）夏期休館

9月16日（木）―10月29日（金）
奥村光也 作品展
Mitsuya Okumura “ Angle of Silence II ”

フォト・ギャラリー・インターナショナル（虎ノ門）
東京都港区虎ノ門 2-5-18 Tel. 03 3501 9123
月－金 11:00－19:00 土・日・祝 休館
地下鉄銀座線虎ノ門駅下車 2番出口より徒歩5分

P.G.I. Shibaura（芝浦）

6月22日（火）―7月31日（土）
鈴鹿芳康 作品展 「風曼陀羅」
Yas Suzuka “ Wind Mandala ”

8月3日（火）―9月14日（火）
Huntington Witherill “ Photographs ”
ハンティングトン・ウィスリル 作品展

9月20日（月）―10月30日（土）
普後 均 作品展「見る人」
Hitoshi Fugo

P.G.I. 芝浦
東京都港区芝浦 4-12-32 Tel. 03 3455 7827
月－土 11:00－18:00 第2・4土，日，祝 休館
JR田町駅芝浦出口（東口）より徒歩10分
ゆりかもめ 芝浦埠頭駅より徒歩15分